

FINE通信

今年のテーマ：癌の「勉強」

新潟大学名誉教授・安保徹先生の話から⑦

☆現代医療の問題点

- 現代医療は、症状を、徹底的に薬で取り去るという方向に進んできました。しかし、じつは **苦しい症状こそが治癒のために必要なプロセス** だったのです。
- 現代医療は、症状を消すことに専心したために、治癒とは **正反対** の方向にむかっていたのです。

☆病を慢性化に導く「対症療法」

- 例えば、痛む、熱をもつ、腫れ上がる、発疹がでる、こういう症状はじつに不快です。しかし、その症状こそ患部に血流を送って治そうとしている体の **治癒反応** なのです。
- 熱があるから、痛みがあるからこそ治癒に向かうのです。それゆえ、対症療法は本当の治癒をもたらさないのです。その結果、病を慢性化させてしまいます。

☆治癒反応を止める「薬」の怖さ

- 消炎鎮痛剤 と ステロイド剤 を、病気治療に使い続けてはいけません。「血流障害を起こし組織破壊を促す病をつくる薬」の代表格です。
- 痛みや発熱、かゆみ、下痢などの不快症状は体が治るときに生ずる「治癒反応」です。
- こうした治癒反応を、医者は悪玉とみなし症状を薬で抑える対処療法を行います。
- 患者さんは **いったん楽にはなりますが、治癒反応を抑えられ、病気の治りは悪くなり、さらに薬を足すという悪循環が始まります。**
- 例えば、潰瘍性大腸炎で現れる下痢や腹痛は治癒反応ですが、どこの医療機関で受けても、消炎鎮痛剤とステロイド剤によって、この治癒反応は完全に止められてしまいます。
- 本来、治癒反応を促す治療を行っていれば治る病気も、対症療法を続けることで難治化し、本格的な難病になっていきます。
- 難病 に指定されている病気は、医療が **難病** にしてしまったものが少なくありません。

